魔王が如く

絶対強者の極道魔王、正体を隠して学園を極める

なめこ印

ファンタジア文庫

3018

四天会　鉄の掟

其の一、一家に忠義を立て、
功を積む労を惜しむべからず

其の二、相互扶助を旨とし、
親兄弟を見捨てるべからず

其の三、義理を重んじ、
報恩を怠るべからず

其の四、魔王様の進む"道"に
身命を捧げ、怨敵あらば
其の塵一片残すべからず

口絵・本文イラスト　富岡二郎（RED FLAGSHIP）

1、でくの坊、その正体は

クラウディウス高校。
人類と魔王の「大戦」終結後に大陸東部の首都に建てられた最初の高等学校である。
歴史ある名門校として知られ、かつては王侯貴族のみしか入学できなかった。
が、時代が下って、政治が立憲君主制に移行したのと同時に一般にも門戸を開放した。
とはいえ名門校であることに変わりはない。
今でも名家の子女が多く在籍し、それに相応しい風格を備えていた。
そんな高校における生徒の頂点――生徒会。
この高校の生徒会に所属することはもはや一種のステータスである。
卒業後の進路は言うに及ばず、社会に出てからの人脈という意味でも、ここの生徒であれば誰もが生徒会に入りたいと願うのであった。
が――今年はそんな生徒会に異物がひとり混じっていた。

クラウディウス高校生徒会――通称クラ高生徒会のある日の放課後。
やたら体のデカい一年生オーマ＝ローゼンは、生徒会室の隅の机で眉間にシワを寄せていた。
その顔面の圧たるや、気の弱い者なら失禁物の凶悪さ。
人を五人や十人軽く殺してそうな悪魔面をした彼だが、何も生徒会室で大犯罪の計画を立てているわけではない。
「何だ……こりゃ……？」
オーマがやっているのは簡単な書類の確認作業だ。
羅列された数字が正しいかを検算して確認、ただそれだけの簡単なお仕事……なのだが。
「ううん？」
生憎、彼とは相性が悪いようだった。
先程から遅々として仕事が進んでいない。
それは彼も自覚しているようで、焦りから書類を握る手にも力が入っていた。
書類を睨む眼は爛々と光り、唸る声は地獄の底から響くようだ。
彼の仕事が進んでいないのに周囲も気づいているが、その背中から放たれる圧が恐ろしすぎて声をかけることができずにいた。

「んー……えーと、これとこっちが同じ数字で……？」
一方、オーマはオーマで与えられた書類仕事を投げ出す様子がなかった。
うんうん唸りながら数字と格闘し続けている。
根はまじめ、ということなのだろう。
そんな風に彼が懸命に仕事をしていると。
「おい、一年坊！」
「……？」
不意に声をかけられ、オーマは書類から顔を上げる。
彼の目に映ったのは生徒会の先輩のブランギだった。
口調の粗雑さもカリカリした様子もいつものこと。
何かにつけてオーマに突っかかってくるのがこの先輩の特徴であった。
「何でしょうか、ブランギ先輩？」
「何でしょうか……じゃない！」
怒鳴るブランギの手には一枚のシャツが握られていた。
「生徒会で行う校外ボランティアのシャツを発注したのはお前だな？」
「はい。確かに俺ですが……」

オーマは頷く。
校外ボランティアとは、再来週から行われる生徒会の活動だ。
この生徒会では度々こうした新規業務が追加される。
また今回は校外でのボランティア活動ということもあり、活動の周知を目的とした生徒会Tシャツを作ることになった。
だが問題はデザインだった。
いや、デザインそのものというより、デザインを決めるための会議が、だ。
クラ高生徒会は男女合わせて二十人以上の大所帯である。
しかもこれがなかなかの個性派揃い。
各々こだわりを持っており、デザイン会議は難航した。
やれ袖の丈は何センチだ、色は何色だ、花柄にして、スタイリッシュにしろ、チョイ悪も入れろ、等々。
数時間かけても意見が纏まらず、疲れ果てた彼らはデザインを一年のオーマに一任した。
「皆の意見を参考に上手く作ってくれ」
「安心しろ。どうなっても文句は言わない」
先輩方は口々にそう言った――が、当然そんなのは建前だ。

てんでバラバラな意見を全部纏めるなど無理な話。
要するにオーマは責任だけ押しつけられたのだ。
――で、案の定、この通り文句が怒声となって降ってきたというわけである。
「シャツのサンプルがさっき届いた……これだ！」
ブランギはオーマのデザインしたシャツのサンプルを机に叩きつける。
彼らの話を聞いていた周囲の人間も、どれどれとそのシャツを覗き込む。
で、皆が皆あんぐりと口を開いた。
そのシャツは真っ黒な生地に火を吐く三つ首の黄金竜がプリントされ、さらに仰々しい書体で『クラウディウス生徒会』の文字が書き込まれていた。
「何だこの悪趣味なデザインは⁉」
ブランギは両腕をワナワナさせながら問い詰める。
元々、一年生に全責任を押しつけるなど無責任な話だった。
なのにいきなり怒鳴りつけるブランギを止めよう……と、集まってきた中には良心的な者もいたのだが……。
（これはフォローできない）
と、誰もが匙を投げてしまっていた。

「お前はこれが伝統ある我々生徒会が着るべき物と思うのか⁉」
「えぇと……」
オーマは頭を掻きながら、悪趣味と詰られたシャツを手に取る。
それから二、三度表裏をひっくり返して眺めてみてから。
「竜のデザインがドスが利いてますね」
オーマは満足そうに答えた。
（えぇぇー⁉）
この空気の読めなさに誰もが心の中で総突っ込みする。
「おっっまっっっ……‼」
ブランギは顔を真っ赤にして唇をプルプルと震わせる。
彼はよくオーマに突っかかる先輩だと先程述べたが……実はむしろ振り回されているのは彼の方だったりする。
「このでくの坊！　お前なッッ！」
ブランギは思いつく限りの罵声をオーマに浴びせようとした。
が、その罵倒が声になることはなかった。
横から少女の綺麗な声が割って入ったからだ。

「ふたりとも、どうかしたの？」
声の主は生徒会長のツクモ＝キサラギだった。
彼女は王家の親戚筋に当たるキサラギ家の長女。
名門校であるこの高校の中でも屈指のお嬢様。しかし、その血筋を鼻にかけない柔和な物腰で、男女問わず人気が高い。
また可憐な顔立ちは白百合のように清楚であり、ヘタに触れたら汚してしまうのでは……と、こちら側が畏れを抱いてしまいそうになるほどである。
まさに高嶺の花という形容が似合う美少女が、この高校の生徒会長だった。
「せ、生徒会長⁉」
そんな彼女に不意に声をかけられたブランギは、思わずその場でビシッと背筋を伸ばした。
「大声で話していたけど、何かあって？」
そう言ってツクモは軽く小首を傾げてみせる。
その仕草は美人でありながら可愛らしくもあり、綺麗だが親しみやすさも感じる――本人にその気はないだろうが――ある意味、小悪魔的ですらあった。
「オーマ君、どうかしたの？」

ブランギの返事がないので、ツクモは次にオーマへ視線を向けた。
「えぇと、その……」
「なぁに？」
オーマがどう説明しようか頭を掻いていると、ツクモはさらに尋ねてくる。
その拍子に歩幅一歩分、彼女は顔をオーマに近づけた。
「……！」
さすがのオーマもそれには眠そうな目を見開き、一瞬だけビクッとした。
「あ、ごめんなさい」
「いえ」
男子にも距離感の近いツクモに、オーマは少しばかり照れたように頬を掻く。
と、いつの間にか置いてけぼりにされたブランギがそこでハッとした。
「そうだ！　聞いてください生徒会長！　このバカ、こんなっ、よりにもよって生徒会のシャツをこんなデザインにしたんですよ⁉」
「あら、どんな？」
ツクモはブランギからシャツを受け取って確認する。
彼女はシャツのデザインをゆっくりと眺め、そして……

「ん～、いいんじゃないかしら？」
と、彼女が微笑んだ瞬間、ズコーッとブランギや他数名がその場ですっ転ぶ。
「……って！　何を言ってるんですか会長!?」
「え～ダメかしら？」
「ダメに決まってますよ！　ドラゴンをこの高校のシャツに使うなんて！」
「あらあら、ダメよそんなこと言っちゃ～」
「ですが会長」
「人も魔族も平等よ～。そういう発言をすると～、かえって学校の品格を問われることになるわ～」
魔族とはかつて魔王によって生み出された種族の総称である。
大戦直後は差別や奴隷化などもあったが、現在ではそれらを完全に法で禁じている。
今では人類と友好的に暮らし表社会で商売をする者もいる。
が、歴史的偏見というのはなかなか拭い去れないのもまた事実だ。
ゆえに今でも極一部では魔族を心の中で見下す風潮が存在する。
ツクモの言葉はそれを窘めるものだった。
「……」

彼女の正論の前に、ブランギはそれ以上何も言えなくなる。
「でも～これはちょっと男の子向けすぎるかもしれないわね～」
と、そこでツクモはオーマへも視線を移す。
「生徒会には女の子もいるから、女子用にもうひとつデザインできる？」
「……家に帰って考えてみます」
オーマはこくりと頷く。
「お願いね」
「……ウス」
ツクモは微笑み、オーマはもう一度頷いた。

そんな一悶着もありつつ、その日は下校時刻となった。
オーマも何とか書類仕事を片づけたので、荷物をまとめて帰ろうとした……が。
「ん？」
「……」
学校の校門を出たところで、オーマはブランギとばったり出くわしてしまった。
オーマは軽く会釈してそのまま立ち去ろうとしたが。

「おい待てよ」
ブランギの方がオーマを呼び止め、足を止めた彼の肩に腕を回して逃がさないようにした。
「ちょっとそこまで歩こうぜ」
「はぁ」
ブランギの取り巻きも三人ほどいたため逃げられず、オーマは仕方なく彼らと一緒に歩き出す。
「お前なー、会長にヒイキされてるからってあんま調子乗るなよ」
「いえ、そんなつもりは」
帰り道を歩きながら、ブランギはグチグチとオーマを小突く。
「大体お前は普段からボーッとしやがって、そんなだからでくの坊なんだよ」
「スミマセン」
「少し頭を働かせれば、ウチみたいな名門校のシャツにドラゴンは使っちゃダメだって普通分かるだろ……ったく」
「はい」
オーマは律儀に頷き続ける。

だが彼の素直な態度が逆に癇に障ったのか、ブランギはますます眉間にシワを寄せる。
「お前なぁ！　ちゃんと俺の話聞いて……」
「痛っ！」
その時、ちゃんと前を見て歩いていなかったブランギの肩が、すれ違った男の肩にぶつかった。
「あ、スミマセ……!?」
ブランギは慌てて謝ろうとしたが、相手がいかにもガラの悪いチンピラの集団であることに気づいてギョッとした。
「何すんだこのガキィ……骨折れたじゃねぇか」
「おいおい大丈夫かよお前ぇ～」
「ビョー院行くかビョー院」
チンピラは五人。彼らはお仲間同士で見え透いたウソのお芝居をしつつ、ブランギたちを取り囲んで退路をふさいだ。
そして、先程ブランギにぶつかったハーフゴブリンが一歩前に出た。
どうやら彼がこのチンピラ集団のリーダーらしい。
「落とし前どうつけてくれんだあぁん？」

いかにも喧嘩慣れしたリーダーは、そのデコボコの顔を近づけてブランギに凄んでみせる。
「あ、えっと……」
ブランギは冷や汗を流しながら口ごもる。
彼も彼の取り巻きもチンピラに囲まれ、身を竦ませて怯えきっていた。
中には足を震わせている者もいるが……ひとり、なんとなく一緒に囲まれたオーマだけは平然とした顔をしていた。
「黙ってりゃ許されると思ってんのかぁ？　人の骨折っといてよぉ？」
「アニキ、こいつらクラ高の生徒ですぜ」
「へへへ、それじゃあ親は金持ちなんだろ～な～？」
骨が折れたというのはどう見てもチンピラのウソ。
これが強請りだと分かっているが、相手の強面に腰が引けて何も言えない。
「ちょっと兄ちゃんそこの路地裏行こうや」
そう言ってチンピラはブランギの制服を掴もうと手を伸ばす。
が――その横からオーマが腕を伸ばし、チンピラを遮った。
「あン？」

「……」
今度はオーマがチンピラに睨まれるが、彼は生徒会にいる時と同じく相変わらずぼんやりとした顔をしていた。
「あの、先輩がそちらにぶつかったのは俺の所為なので」
「ハァ？　何だじゃあテメェが責任取ってくれんのか？」
「……ウス」
オーマは小さく頷き、まだ右往左往しているブランギたちの方を振り返る。
「先輩たちはどうぞ先に帰っててください」
「あ、ああ、けどお前……」
「大丈夫ですから」
若干躊躇いは見せたものの、オーマの言葉に促されてブランギたちはそそくさとその場をあとにした。
そうしてその場にはオーマとチンピラが残される。
「……で？　どう責任取ってくれんだ？　こっちは骨折れてんだぞ骨ぇ、治療費と慰謝料払えや」
「そうですか……」

オーマは懐から財布を取り出す。
「これで足りますか？」
そう言って彼が差し出した財布はお札がぎっしりと詰まっていた。
「うぉ……！」
その財布を見て強請った側のチンピラも思わず呻いた。
「これで勘弁してもらえませんか？」
オーマはそこで深々と頭を下げる。
あからさまなイチャモンに対し、この平身低頭ぶり。
周囲からはそれがいかにも弱気な小心者に見えることだろう。
だが、見る目のある者ならば、彼が終始落ち着き払っており、突然のトラブルにも眉ひとつ動かしていないことに気づいたかもしれない。
「へっへへっ、いいやぁまだ足りねぇなぁ」
しかし、ただのチンピラたちにそこまで見抜く目はなかった。
それどころか欲張った彼らは、さらに金を脅し取ってやろうと考えたようだった。
「……生憎、今はそれしか手持ちがないので」
「だったら親に出してもらえや」

「……いえ、それは」
そこで初めてオーマはほんの少し口ごもった。
「いいから家案内しろや。どうせどっかのボンボンなんだろ？」
チンピラたちはオーマを逃がさないように囲み、彼の家まで道案内をさせる。
彼らの行動はカツアゲにしてもリスキーだったが、オーマの差し出した財布があまりに分厚かったため、この金蔓を逃がしてなるものかという心理が働いたようだ。
道中、オーマは無言で歩き続けた。
そんな彼をチンピラたちはニヤニヤと笑い、時折小突く。
「……」
それでもオーマは平然としていた。
やがて辿り着いた彼の家は広い庭付きの一軒家だった。
いかにも裕福そうな家を見て、チンピラたちはここからいくら金を毟り取れるかと期待に胸を膨らませ、口許をだらしなく歪ませた。
が、その笑みが引き攣ったのは、オーマの家の玄関が開いた時だった。
「お帰りなさい」

オーマを出迎えに現れたのは、身長二メートルを超える蜥蜴男だった。
腕も脚も胴も太く、どこも筋肉質で、尖った鼻先から頬にかけての一本傷は、明らかにその肉体が実戦で鍛えられたものと物語っている。
その圧倒的な〝暴〟の気配に、先程のブランギたちのようにチンピラたちは竦み上がる。
「……？」
一方、蜥蜴男の方も思わぬ団体客に首を傾げていた。
彼はオーマへと視線を向けて。
「二代目、そちらはお友達ですか？」
と、尋ねた。
その丁寧な物言いは、蜥蜴男よりもオーマの方が目上の人物であることを示していた。
「俺の客だ。こちらさんに少し御迷惑をかけちまってな、詫びの印にもてなしてやってくれ」
「なるほど……そういうことでしたら、どうぞ皆さんこちらへ」
オーマの指示を受け、蜥蜴男は丁寧な仕草でチンピラたちを家の中へと招いた。
「あ、あ、いや、俺たちは別にその……な？」
「そうそう別に、そんな、迷惑なんて、なぁ？」

一方、チンピラたちは想定外の事態にすっかり逃げ腰になっていた。
だがしかし、彼らが断ろうとすると、蜥蜴男は爬虫類特有の鋭い眼光をさらにギラリと光らせる。
「あんた方……まさかこちらの誘いを断るつもりで？」
「いえいえいえいえいえいえ！」
慌ててリーダーは首を横にブンブン振った。
もう逃げるわけにもいかず、彼らは蜥蜴男に促されるままに室内に入る。
「俺は着替えてくるから、先に客間に通しておいてくれ」
「はい」
靴を脱いですぐオーマはチンピラたちの前からいなくなる。
「ではどうぞこちらへ」
蜥蜴男は丸太のような腕でチンピラたちを促す。
「〜〜〜〜」
長い廊下を歩く間、チンピラ五人は互いに肩を寄せ合っていた。
気分としてはもはや怪物のはらわたの中にいるようなものだろう。誰もがブルブルと震えまくり、悲観的な者は「もう生きて出られないのでは？」とさえ考えていた。

やがて彼らは畳敷きの大広間に通される。
大広間の中央には大人数で食事をするための長机があって、蜥蜴男はそこに五人分の座布団を敷いた。
「こちらでお待ちください」
言われるがままチンピラたちは座布団に座る。正座だった。
「!?!?!?!?!?」
そこでふと大広間の壁にかけられた額縁を見上げた彼らは、ついにこの日最大の驚愕に襲われることとなる。
その額縁に入れられた半紙には、見事な達筆でこう書かれていた。

『四天会』

ケチなチンピラでもその名は流石に知っていた。
それは大戦直後のまだ魔族に対する偏見の強い時代に、社会的立場の弱い魔族同士が互いに助け合うために作られた互助組織のひとつである。
彼らは歴史的必然によって日なたを避けて闇に溶け込んだ。

やがて表社会で処理できない裏稼業を取り仕切るようになり、裏社会で着実に勢力を伸ばしていった。
今や四天会は大陸東部の裏社会を牛耳る大組織である。
構成員は数万人を数え、その幹部にはかつての魔王四天王の直系が名を連ねる――まさに東の親玉と呼ぶべき存在。
無論ただのチンピラなど四天会と比べたら蟻か蚤に等しい。

「……え!?」
そこでチンピラのリーダーははたと気づく。
先程オーマは蜥蜴男から「二代目」と呼ばれていた。
こういった組織でそのように呼ばれる立場の者は限られている。
（てことはあのボケッとしたガキはまさか、四天会幹部の息子!?　いや、それともまさか四天会のボスの息子!?）
リーダーがその事実に気づくと同時に大広間の戸が開き、仕立てのいい部屋着に着替えたオーマが現れる。
「スススススミマセンでしたあああ」

オーマの姿を認めるや否や、リーダーは畳の上でスライディング土下座を決めた。
その素早い動きに、残りの四人も慌ててそれに続く。
「まままさか四天会のボスの息子さんに無礼を働くつもりは……」
「バカ野郎‼」
必死に謝る男たちに対し、突然怒声を吐いたのは隣で話を聞いていた蜥蜴男だった。
このチンピラたちがオーマに無礼を働いたと聞いて、四天会の一員らしき彼が怒るのは当然の反応である。
しかし、次に蜥蜴男が口にしたのは、またしても男たちの予想を裏切る言葉だった。
「ウチの大将をガキ扱いするつもりかテメェ！」
「え？」
あまりの驚きに、思わずチンピラは顔を上げる。
「大将って……じゃあまさか⁉」
「そうだ！」
蜥蜴男は憤慨した様子で答える。
「――この御方は初代魔王様の魂を受け継いだ全魔族の王、二代目魔王様だ！」

幕間1

その後、チンピラたちは酒と食事を振る舞われるもノドを通らず、オーマに財布を返して畳に額を擦りつけ、ズボンを半分濡らしながら帰っていった。

そして夜、オーマは自室で宿題をしていた。
「……ふぅ」
が、半分ほど終わらせたところで集中力が切れてしまう。
気分転換に酒でも呑むか……と思ったが、高校入学を機に禁酒していたことを思い出して手を止める。
仕方なく彼は夜風に当たろうと、部屋の窓を開けて月を見上げた。
「ガクセーってのは思ったよか大変だな」
しみじみとオーマは呟く。
実際、毎日宿題はあるし、酒だって自由に呑めない生活というのはなかなか大変だ。

それに彼が魔王なのも学校には秘密にしなければならなかった。
あのチンピラたちにも秘密にしてくれるように頼んだ。
帰り際の怯えきった様子からして、おそらく秘密を漏らすことはないだろう。
とはいえ、このことは普段から気をつけなければならない。
学生とは本当に堅苦しく、面倒の多いものだ。
でもいいのだ。
これは彼自身が望んだことなのだから。
彼は月を見ながら、ほんの数ヶ月前の出来事を思い出す――

2、二代目、襲名

その日、四天会の本家には名だたる幹部が勢揃いしていた。
〈サラマンダー〉。
〈ウンディーネ〉。
〈ノーム〉。
〈シルフ〉。
それら筆頭四家の頭首とその側近に加え、下部組織の中でも有力な家々の長、四天会と繋がりのある有力者などなど。
正装を纏った彼らはボディーチェックを受け、続々と本家の敷居を跨ぐ。
大広間には人魔問わず裏社会の実力者たちが一堂に会していた。
その錚々たる顔触れは見る者が見れば腰を抜かすほどのものだ。
それもそのはず――今日は二代目魔王の襲名式なのだから。

本家大広間に集った幹部。
その筆頭たる四家の頭首は当然最前列に席が用意されていた。
四者四様に貫禄を放つ彼らだが……。
「ふわぁ～あ……っと」
サラマンダー家五代目頭首オルド＝サラマンダーはあくびを噛み殺す。
彼は燃えるような赤髪を全て逆立てた偉丈夫だ。
激怒するとその赤髪が炎に変化し、全身の毛穴からも火を噴き出すことができる。炎の温度は自由自在で、炎の魔人という異名を持つ。
「オルド。何じゃそのあくびは？」
「うっせぇよレイジ。俺は朝に弱いんだ」
「部下に示しがつかんだろうが」
オルドに釘を刺すのはシルフ家七代目頭首レイジ＝シルフ。
彼は小さな竜巻でできたヒゲ（？）の似合う老紳士である。
が、実のところ隣のオルドと歳は変わらなかった。シルフの家系は妖精の血が混じっているため短命で老化が他の種族より早いのだ。
「ったく、爺は短気でいけねぇな」

「何じゃと？」
「やめなさいふたりとも。大事な場ですよ」
口喧嘩を始めるふたりを、さらにその隣に座る女性が窘める。
彼女はウンディーネ家四代目頭首マリン＝ウンディーネ。
雪と氷に由来する妖怪の純血種で、その美貌はまさに氷のように冷たい。
「……」
ちなみに最後の四天王ノーム家の頭首は我関せずといった風情であった。
彼はボーッとした表情のまま、特徴的なまん丸鼻をヒクヒクさせている。
「にしても二代目ってのは、一体どんな野郎かね？」
「オルド。新頭首に対して何じゃその口の利き方は」
「世間話だろ。いちいち目くじら立てるな。なあ、マリンはどう思う？」
「そう言われても……私がお爺さまから聞いた話では確か……五メートルを超える巨軀にドラゴンの如き鱗、雷を操る双角に伸縮可能な翼、オリハルコン並の爪牙、オーガ兵十騎に勝る膂力に、途方もない魔法が使えた……とか」
「儂が聞いたのもそんな話だったな」
マリンの話にレイジも同意を示す……が。

「ってんなわけあるか！　どんな怪物だ⁉」
「うるさい」
「うるさい」
思わずノリツッコミしたオルドがレイジとマリンに小突かれる。
「テメェら人のドタマを打楽器と勘違いしてねぇか？」
後頭部を押さえてオルドが低い声を出すが、レイジもマリンも無視した。
「まあ……ですけどデカくて強くて翼が生えて魔法も使えるとなると――浮かぶのは最強種の一角であるドラゴンですね」
「ドラゴン⁉　マリンテメェ、二代目の正体がドラゴンだってぇのか⁉」
「ツバを飛ばさないでください。あくまで憶測です」
「冗談じゃねぇ！　ドラゴンなんざ竜王会のクソどもだけで十分だぜ！」
竜王会とは大陸西部の裏社会を統べる大組織だ。
本家及び幹部の全てがドラゴン族で固められ、その戦力は四天会にも匹敵する。
両雄は東西の裏社会の顔役として長年抗争を続けていた。
「あのトビトカゲども、去年もウチの手下を十人以上殺りやがった」
「……そんなに殺られたのか」

「ああ」
オルドは苦々しく呟く。
「竜王会の奴ら、西の田舎に引き籠もってやがりゃいいのに、ここ数年東側でやたら活発になってやがる。オメェらもそういう噂くらい聞いてんだろ？」
「そうだな」
「ええ……」
「その内ヤツら皆殺しにしてやる……」
〈サラマンダー〉は四天会の武闘派筆頭。
竜王会に対しては一番憎悪を募らせているのがオルドだ。
――と、炎髪を逆立てる彼のスーツからブスブスと黒煙が立ちこめ始めた。
「……！　おいオルド、こんなところで火を噴くな！」
「あ？　おっ⁉　ぬっ、うぬおおおお⁉」
どうやら感情が昂り、全身の毛穴から火が噴き出してしまったようだ。
当然、大広間は騒然となり、飛び散った火の粉が座布団にも燃え移る。
「この単細胞が！　本家を火事にする気か⁉」
「マ、マリン！　お前の魔法で消してくれ！」

「あああもう男ってのは歳食ってもバカばっかりですね！」

さて、まもなく襲名式の時刻になり、本家頭首代理を務めるサラリサが大広間の戸を開けて現れた。

元魔王付き参謀にして千年を生きる大魔女。

不老不死とも噂されるかつての大戦の生き残り。

初代魔王にも直接仕えたことのある魔族で、当時から抜きん出た才覚才腕、そして忠誠心に溢れていた。戦後に四天会を創始し、ここまで発展させたのも彼女である。

ゆえにその人望・権力は凄まじく、四天王ですら彼女に逆らうことはできない。

衰えを知らぬ美貌の大魔女は静々と大広間を進み、上段の間のすぐ脇に腰を下ろす。

と、そこで彼女はふと眉を顰めた。

「焦げ臭いですね」

サラリサの呟きにギクッとなる四天会幹部筆頭の三人。

彼女の視線は最前列のオルドへ向けられる。

「オルドさん、なぜ上半身裸なのですか？」

「あ、いえ、今日は暑くて」

「暑い？　まだ春は遠い季節ですよ」

「ここ今年は暖冬ですから！　ハハハ、俺が暑がりなのは姉御もご存じでしょう？」

「ええ、あなたの好き嫌いも何もかもご存じですよ」

表情ひとつ変えないサラリサに、オルドはもう冷や汗ダラダラだった。

しかし、彼女はそれ以上彼を問い詰めなかった。

襲名式の開始時刻になったからだ。

「ではこれより、二代目魔王オーマ様の四天会頭首襲名式を行います」

大広間の上座の戸が開き、ついに二代目が現れる。

面と体格は立派だ。ウン百万もする正装を着こなし、見てくれには貫禄もある。

しかし、この場に集った大人たちの想像よりも彼はずっと若かった、いや、若すぎた。

（……ただのガキじゃねぇか）

最前列のオルドは二代目と呼ばれた少年を見て落胆を隠せなかった。

あれこれ言っていたが、実は彼は『魔王』に密かに期待していたのだ。

なぜなら、これまでサラリサは竜王会との抗争に消極的だったからだ。

彼女の目的は常に四天会の存続と発展。

つまり抗争のような金と力の無駄遣いには興味がないのだ。
無論、やられればやり返す。
が、必要以上の……つまり感情任せの報復などは決してしてこなかった。
それがオルドには歯痒かったのだ。
だが祖父から聞かされた伝説の魔王であれば、自分に逆らう竜王会を許すわけがない。
二代目魔王が竜王会との全面戦争を命じれば、サラリサとて文句は言わないはずだ。
そうなれば存分に奴らに借りを返すことができると思っていたのだが……。
（こりゃ期待はずれだな……）
オルドが落胆を奥歯で噛み潰しているのをよそに、襲名式は進んでいく。
順調に親子盃などもすみ、襲名式もいよいよ後半に入った。
「ではオーマ様、皆様に今後の抱負などをひとつお願いします」
「ん」
サラリサに促され、オーマはゆったりとした動作で立ち上がる。
「抱負っても、俺が今すぐどうこう口出しする気はない。何かあれば相談役に聞け」
オーマは低い声でボソボソと話した。
彼が新頭首となったことで、頭首代理だったサラリサは自ら相談役に退いた。

とはいえ、まだ若く二代目を襲名したばかりの彼に組織の運営は不可能。
今後も実質的に四天会は彼女が主導していくのは明白だ。
明白だが、それを実際口にするのかどうかはまた別問題だ。
組織のトップが「何かあればナンバーツーを頼れ」と公言するとは情けない――と、そのような評価を周囲から下されかねない。
（こんな坊やが二代目とあっちゃ竜王会のヤツらにますますつけ込まれちまう）
ゆえにオルドがそう危惧するのも致し方ないことだった。
その後もオーマの挨拶は終始控えめで、『魔王』に過剰な期待を膨らませていた面々は肩透かしを喰らった気分になった。
「最後に、何か俺に訊きたいことはあるか？」
オーマは最後にそう尋ねた。
だが誰も手を挙げようとしない。
それも当然。襲名直後の頭首に妙な質問などできるはずがない。
万が一、オーマが答えに詰まれば彼に恥をかかせることになる。
そんなことをしでかせばサラリサが黙っていないだろう。
質問があっても後日に回すのが無難――誰もがそう判断した時。

「……俺からひとついいですかね？」
オルドがまさかの手を挙げた。
場内がざわつく。同じ四天王のレイジとマリンもギョッとした。
「何だ？」
オーマに促され、オルドはゆっくりと口を開く。
「四天会のことはしばらく相談役に任せるとのことですが……なら、二代目はその間どこで何をするおつもりで？」
流石に最低限の礼儀は弁え、オルドは彼なりに丁寧な言葉遣いで質問をした。
だがその質問内容は先程誰もが懸念した「二代目に恥をかかせる」可能性が高かった。
もしオーマが言葉をしくじれば、本家とサラマンダー家の間に確執が生まれかねない。
「ん、俺のことか……」
オーマは質問を咀嚼するように頷く。
一同が緊張の面持ちで注目する中……彼は静かにその質問に答えた。
「俺は、しばらくガクセーってのもやろうと思う」
襲名式終了後、四天会の身内のみで料亭に移動して二代目襲名を祝う宴が開かれた。

「……しかし、まさか四天会のボスが学生になるとはたまげましたな」
レイジはお猪口で酒をチビチビやりながら、隣のマリンに話しかける。
「ええ、そうですわね……」
先程からこの話題がのぼるのは何度目になるだろうか。
何回も何回も同じことを話している……が、肝心なことが言えなくて、いや、触れられなくて、ふたりとも遠回しに話すことしかできず、酒ばかり進んだ……が。
「……いや、何でですの!?」
酔いが回ってついに我慢できなくなったのか、マリンが杯を机に叩きつけて叫んだ。
「あの方は魔王様なのでしょう!? 人類相手に大陸を二分して戦ったあの伝説の!?」
「まあまあ、落ち着いて。どうぞお水を」
「……スミマセン」
レイジに水を勧められ、マリンはそれを一気飲みする。
「……まあ、別にいいんですのよ? 私はオルドさんみたいに戦争がしたいわけではありませんし? ただちょっとイメージが……」
「分かります。儂もですから」
魔族なら誰でも子供の頃から寝物語りに数々の魔王伝説を聞いて育つ。

大きくなるにつれそれが脚色のついた話と気づいていったとしても、それでもやはり魔王とは過去に実在した魔族たちの王であり、畏敬の対象なのだ。
なのだが……実際に現れた『二代目』ときたら。
「何と言うか……普通? でしたね」
「見た目はまぁ、魔法で変えるとか、あと変身を何回残してるとかもありますから」
レイジはマリンの愚痴っぽい話を聞きつつ、彼女も意外と魔王に幻想を抱いていたのかもしれないと思っていた。
「まあ、まだ頭首もお若いですし、サラリサ様がこれからキチンと教育を……?」
「そうですわね、サラリサ様でしたら……?」
そこでふたりはふと気がついた。
いつもなら一番騒がしい奴がさっきからやけに静かだと。
「オルドの奴、どこ行った?」
「オルドさん、どこ行きました?」
ふたりがオルドの不在に気がついた頃、彼はとある人物を追いかけて廊下に出ていた。
「サラリサの姉御!」

「おや？　オルドさん、どうかしたのかしら？」
オルドが呼び止めると、サラリサはたおやかな仕草でこちらを振り返った。
彼らがいるのは料亭の端っこで、ちょうど廊下の角となった密談に持って来いの場所だ。
「姉御、折り入ってお話が……」
「オーマ様のことですか？」
「……！」
用件を当てられオルドはドキリとさせられた。
機先を制された気分になり、彼はひとつ咳払いをしてから話し始めた。
「めでたい日にこんなこたぁ言いたかありませんが……姉御は二代目のことどう思ってるんですかい？」
「どう、とは？」
惚けるようにサラリサは小首を傾げる。
「そりゃもちろん襲名式の最後のことですよ。本当にガッコーになんか通わせるんで？」
「オルドさんはそれに問題があるとお思いですか？」
「当然でしょう。んなカタギのガキみたいな……俺らの稼業に学なんて必要ありやせん」
「その脳筋はいい加減直した方がよいですね」

サラリサは窘めるようにオルドの言を制した。
「それに学校に通いたいというのはオーマ様のご希望です」
「しかし……！」
「いいから聞きなさい」
サラリサはまっすぐオルドを見つめる。
「今の時代、この稼業も様々な深謀遠慮や搦手、時には表の人脈とのコネも必要になります。そこを考えれば、学校へ行きたいと仰ったオーマ様の意図も読めるでしょう？」
「どういうことです？」
意味が分からずオルドは尋ね返す。
「オルドさんも少しは自分で考えなさい。いいですか？　有力者とのコネというのは、若い頃から構築する方がスムーズなのです」
金と権力を持った大人に近づくにはそれ相応の見返りが必要になり、会うための手順なども踏まねばならず、手間がかかる。
一方、将来性が有望な若者と学生の内に友誼を結ぶのはそれよりはるかに容易い。
「オーマ様にはこの国で一番の名門に入っていただきます。そこで存分に品定めをして、いずれは将来に役立つ人間を懐柔、あるいは弱味を握り支配下に置くおつもりでしょう」

「……そう二代目が仰ったんで？」
「ですから言葉の裏を読みなさい。よき部下とは主の意図を汲み取るものですよ」
サラリサは少し嘆息しながらオルドを叱る。
まるで子供を諭すような口調に、彼は昔に戻ってしまったような錯覚に陥って気恥ずかしくなるが、頭をブルブルと振って何とか持ち直す。
「いえいえ！　そんな悠長なこと言ってられませんぜ。姉御もご存じでしょう？　近頃、竜王会の三下どもがウチの縄張りで好き勝手やってることを」
オルドはグッと身を乗り出してサラリサに訴える。
「ヤツらが調子に乗る前に一発ガツンとかましてやらないといけません。それには二代目にバシッと旗頭に立っていただいて、西の連中と戦争をしていただかないと！」
「オルドさん……ですから今後はそういう脳筋思考は控えて」
「姉御！」
叱るというよりむしろ呆れ気味のサラリサに、オルドはなおも詰め寄る。
感情が入りすぎたためか、赤髪は赤熱して炎となり、新調したスーツの節々からまた黒煙がブスブスと立ちのぼり始める。
カッと目を見開いて凄むオルドの顔は、炎の恐ろしさと相まってまるで鬼の形相だった。

「オルドさん、熱いですよ」
普通の女性なら「襲われる」と思って悲鳴を上げる場面だが、流石四天会の女傑は炎の熱を軽く手で払う仕草をしただけだった。
それだけなら別によかっただろう。
「頼みますよ姉御！　姉御が号令出してくれりゃ他の連中だって覚悟決めて……！」
しかし、どうしても戦争がしたかったオルドは引き時を誤り、さらにサラリサに迫る。
「何してやがる……？」

そこへ、低く、重たい……重たい声がかかった。
「……ッ!?」
オルドは背筋を覆い尽くすような声の圧で息を止めた。
一瞬分からなかったが、今の声は間違いなくあの襲名式で聞いた新頭首の物……が、そこへ込められた殺気は、武闘派筆頭として数多の修羅場を潜り抜けた彼も味わったことのない重圧だった。
「そこで、母さんに何してんだ？」

「ッ！」

再びかけられた言葉にオルドは思わず振り返る。

それは自己防衛本能だったのだろうか……ともかく彼は、恐怖から身を守るために背後の『ソレ』と対峙し。

――そこから先の記憶がオルドにはない。

料亭中に轟いたそのドンッ‼という爆弾が爆発したような轟音は、当然のことながらレイジの耳にも届いた。

「な、何だ⁉」

レイジを含む四天会の面々は慌てて宴会場を飛び出し、万が一に備えた戦闘態勢で音の響いた方角へ走っていた。

そこで見た光景に、先頭を走っていたレイジは目を丸くする。

「こりゃあ一体……」

彼の視線の先では、建物の一角が丸々爆ぜて粉々になったような有り様だった。

廊下や天井、壁に到るまで粉砕され、外の風が建物の中に入り込んでしまっている。

それはまるで……そう、体長五メートルはある巨人が突如現れて暴れた跡のような……

とにかく凄まじい破壊の痕跡だけが残されていた。

「レイジさん」

「！　サラリサ様、ご無事で」

不意に横の部屋から声をかけられ、レイジは声の主を知って安堵の息を吐く。

「サラリサ様、ここで一体何が？」

「さあ？　私もさっき来たところでね。それより」

サラリサはそう言いながら何かをレイジに向かって投げ出す。

それは気を失ったオルドの巨体だった。スーツの所々が破れているがケガはなく、どうやら気絶しているらしい。

「オルド⁉　姿が見えないと思ったら……」

「そこの廊下で気絶していたのを見つけてね。悪いけれど、その辺の部屋で看病してもらえます？」

「は、はい。それはもちろん」

「頼みましたよ」

用件だけ告げて、サラリサはそのままレイジたちが来た廊下を戻っていってしまった。

「……」

何か知っていそうだが、かといって呼び止めるわけにもいかず、仕方なくレイジは預かったオルドの体を揺すった。

「おいオルド……起きろ、おい」

「……う……うぅ……んん」

その時、ほんの少しオルドの瞼が開く。

「起きたか。ここで何があった？」

「ナ、ニ……が……あ、俺は……さっき……」

覚束なくも何か思い出そうとしたオルドだったが、そこで急にカッと目を見開き。

「ひぎゃあああ！」

「お、おい⁉」

「あっあばっあばばばばおだすげえええええ」

いきなり赤ん坊のように大泣きし始めたオルドは「おがあぢゃあああん」と叫んだあと、今度は白目を剝いて全身をビクンビクンと痙攣させ。

「おっおおおぴっ⁉　あばばばばばひぎいいいいやめっあああああああああ⁉」

と、意味不明な絶叫を上げ、その内またガクーッと力を失って再び気絶した。

まるで恐怖のあまり幼児退行を起こしたような有り様に、レイジたち一同は心配するよ

りもむしろ呆気に取られてしまう。

「こいつがこんな風になるなんて……一体何があったんだ」

オルドの勇猛さを知っているレイジは思わず空唾を飲み、ともあれ失神してしまった彼を介抱するため、部下とともに肩を貸して空き部屋へと運んだのだった。

幕間2

「オーマ様。ただの乳母に過ぎない私を母さんと呼んで心配してくださるのは嬉しいのですが、あまり我を失ってその御姿を晒してはいけませんよ？」

あの後、オーマはそうサラリサに注意を受けてしまった。

てっきり彼女がオルドに襲われていると思ったのだが、どうやらそれは勘違いだったらしい。

無闇に真の姿を晒したこと、料亭を破壊してしまったことなど、諸々を反省しながらオーマはその日の床に就いた。

「……」

だがあんなことがあった所為か、どうにも寝付きが悪い。

十分ほどで起き上がり、再び部屋の電気をつけた。

「こんな時は……アレか」

オーマは部屋の押し入れ――の天井の板をはずした隠し棚から、そのブツを取り出す。

そのブツとは何か……ちなみに酒ではない。

それは一握りの才人の手によってのみ生み出され、時とともに常に進化を続ける文化の極み。

即ち、漫画本である。

「……」

押し入れの中にライトを持ち込み、家人の目を逃れて夜中に漫画を読み耽る。

それはサラリサにも秘密の、彼の数少ない趣味のひとつである。

彼と漫画の出会いは数年前。

サラリサから魔王の二代目としての英才教育を受けていた頃、受験生もかくやという濃密スケジュールに疲れ、コッソリと家を抜け出た時のことだ。

当時、ほとんど外に出ることを許されていなかったオーマには、ひとつ行きたいところがあった。

それは家の使用人が話していた『コンビニ』なる場所。

そこはいつでもどこでも営業しており、欲しい物なら何でも揃う便利な店らしい。

買い物すらしたことのなかった彼は、一度自分で好きな物を買ってみたかったのだ。
はたして件のコンビニなるものはすぐに見つかった。
「いらっしゃいまっ……!?」
入店したオーマを見て店員は声を詰まらせていたが、彼は気にせず中へ歩みを進めた。
彼は握り締めた紙幣をクシャクシャにしながら店内をうろつき――ふと雑誌コーナーの一角で歩みを止める。
「……？」
それが本であることは一目で分かった。
しかし、オーマの知る本とは基本的に『教科書』ばかりだった。
ゆえにその棚に並んだ様々な雑誌、しかも内容もバラエティ豊かな本の数々に、彼はまず軽い衝撃を受ける。
が――
「……！　……!?　!?!?ッ!?」
――真の衝撃は手に取ってみた漫画雑誌を開いて読んでみた時に訪れたのだ。
オーマの知らなかった世界がそこにはあった。
彼は夢中でその漫画雑誌を読み耽り、気がつけばそれを持ってカウンターへ向かってい

たのだった。
ぱらり
昔を懐かしみつつ、オーマは幾度も読んだその漫画のページを捲る。
「……フッ」
そこでオーマの口許に笑みがこぼれる。
その表情は今日イチ癒やされたものだった。
オルドのこともあったが、その前にも襲名式があり、彼にとっても気を張った一日だったのだ。
ちなみに彼が読んでいる漫画はいわゆる学園ラブコメであった。
「ガッコー……楽しみだな」

3、裏社会の魔王、生徒会に入る

その日の朝、オーマが転入するクラウディウス高校の制服が届けられた。
常人の倍ほどの布地を使った制服は彼の体にピタリと合い、新品の着心地もあってよい仕上がりとなっていた。
「オーマ様、失礼します」
その時、オーマの部屋にサラリサが入ってきた。
「いよいよ今日から学校ですね」
「ん」
鏡で制服を確認していたオーマは生返事をする。
「差し出がましいようですが、念のため学校生活を送るにあたっていくつかご注意を」
「ん」
「まず人付き合いですが、最初は魔族であることは隠して過ごされるとよいかと存じます。今のオーマ様の御姿はほぼ人間ですのでバレる心配はございません」

「ん」
「次に授業ですが、こちらは全力でやってよろしいかと。どうぞ他の人間どもを圧倒し、格の違いを見せつけてきてくださいませ」
「ん」
「最後に、こちら私の方で目星をつけたリストです」
そう言ってサラリサはファイルに入った紙束を差し出してくる。
「リスト？」
そこで初めてオーマは振り返り、そのファイルを受け取った。
「どれも権力者の親を持つ将来のエリート候補の子供、そのプロフィールになります。ご学友を選ぶのに是非ご活用ください」
彼女はオーマが学校で将来へのコネを作り、そこから表社会の権力を掌中に収めるつもりなのだと考えている。
そのためにこのリストを用意したのだろう。
そこには権力者の子女のあらゆるデータが、男女問わず記載されていた。中には年頃の少年少女にとって致命的な情報もあり、それを上手く使えば弱味を握ることもできる。
しかし。

「……いらねぇ」
オーマはファイルの中身を一瞥したあと、それを部屋のベッドの上に放り捨てた。
「……！　失礼しました」
せっかく用意した物をぞんざいに扱われ、サラリサは口許を手で押さえる。
その顔はなぜか尊敬と喜びに満ちていた。
「獲物はご自分の目で見て選ばれるおつもりなのですね。私としたことが過ぎた真似をいたしました」
「いや……まあいい」
オーマは何か言いかけたが面倒になったのか途中でやめた。
「まもなくご送迎の準備が整いますので、もう少しお待ちくださいませ」
「ん……だが、本当に車でガッコー行っていいのか？」
そこが少しオーマの気になっていたところだった。
「問題ございません。クラウディウス高校は人間の王族も通う名門校です。実際、送迎車用の駐車場もございます」
「そうか」
ともあれ学校が楽しみなことに変わりはなかった。

オーマは再び鏡に向き直り、送迎の車の準備が整うまで新品の制服を眺め続けた。
その一時間後、オーマは高校に初登校した。
そこで彼は最初の躓きに気づく。
まず思ったより車で登校している生徒が少ない。
クラ高は名門校だが近年は一般にも門戸を開放している。
その中で運転手つきの車で送迎してもらっている生徒というのは、一部の限られた上流階級に限られるのだ。
さらにその送迎されてきた生徒が見知らぬ顔の転入生――しかもガタイがよくてめだつ一年生――となれば、当然注目を浴びる。
「二代目！　足下にお気をつけくだせぇ！」
次に送迎車のドアを開けてくれる運転手の顔が厳つい。
他の運転手が金持ちの使用人っぽい若者や老人であるのに対し、オーマのところの運転手は四天会の三下が務めていた。
これがまあ同じ職なのに雰囲気が違う違う。
もうその三下が車の外に出た瞬間、周囲の生徒がザワつくほどだ。

「二代目！　行ってらっしゃいませ！」
「おう……もう少し声落とせ」
「へい！」
大声を張るのも深々とした礼も彼なりの礼儀だ。
ゆえに咎めるわけにもいかず、とりあえず明日からは徒歩通学にしようと思いながら、オーマは下駄箱へ向かった。

「オーマ……ローゼンさん。こちらがあなたが入る一年A組です」
「はい」
職員室で担任と顔合わせを済ませた後、オーマは自分が入る教室へ連れてこられた。
ちなみにローゼンというのは偽名だ。
今の彼は四天会がバックにいるフロント企業の御曹司ということになっている。
「転入生が来ることは事前に伝わっています。教室に入ったら私がまずあなたを紹介しますから、その後は軽く自己紹介も兼ねた挨拶をしてください」
「……はい」
本当はもう少し待って欲しかったが、担任はさっさとドアを開けてしまった。

仕方なくオーマも担任に続いて中に入る。
「あれ誰？」
「てかデッカ」
「顔怖くない？」
教室に入ってきたオーマを見て生徒たちがヒソヒソと話す。
「はい皆さん、お静かに」
やはり育ちがいいのか、担任のひと言で教室は静かになった。
「昨日お伝えした通り転入生をご紹介します。こちらローゼン商社の〜〜」
担任はオーマの偽プロフィールを読み上げていく。
「さて、それではローゼンさん。ひと言挨拶を」
「はい」
担任に促され、オーマは頷く。
同時に教室中の視線が彼へ注がれる。
「……」
その瞬間、思わずオーマの表情筋はかつてない強張りをみせた。
――魔王たる者、他者に対しいたずらに弱味を見せること勿れ。

幼少期よりサラリサに魔王の英才教育を受けた彼は、緊張や重圧を感じるとそれを面に出さないために顔面に力が入ってしまうのだ。

穏やかな表情さえしていればむしろ眠そうに見える顔なのだが、力んだ時の彼の眼力たるや猛禽類か大型肉食獣のそれである。

「ヒッ……！」

最前列でオーマの間近にいた女子生徒のひとりが悲鳴を上げ、目尻に涙を浮かべてガタガタと震え出す。

似たような症状に陥る者が教室中に複数いた。

「……オーマです。よろしくお願いします」

「はい。ありがとうございます」

唯一、担任だけはオーマの隣に立っていたため、彼の力んだ顔を見ることなく済んだ。

「ではローゼンさんは自分の席へ。あなたは背が高いので、窓際の最後尾に机を用意してあります」

「はい」

自己紹介を終えた安堵からか、オーマは元の穏やかな表情で頷いて自分の席へ向かう。

しかし、クラスメイトの心にはすでに恐怖とともに彼の名が刻みつけられ、そのまま

始まった一時間目は非常に重たい空気のままだった。

そして一ヶ月が過ぎた。

「はい。今日の授業はここまで」

授業が終わり、担任が出ていく。

今のは四時間目でちょうど次は昼休みだ。

だが、誰も席を立とうとしない。

身動ぎする者すら皆無だ。

教室にいる全員が少し俯いて自分の机を見つめ、息を殺すようにジッとしている。

「……」

その時、ひとり席を立つ者がいた。オーマだ。

彼は無言のまま教室の後ろのドアから出ていく。

ドアがパタンと閉じた途端、まるで金縛りが解けたように生徒たちは机に突っ伏し、ほぉぉ～と息を吐いた。

「……なんか違うな」

体育館の裏で昼飯を食いながら、オーマは呟いた。

彼の思い描いていた学園生活と現実は微妙にズレていた。

たとえば隣の席のヤマーダに消しゴムを忘れたと言ったら「これで好きなだけ買ってください！」と財布を渡してきた（もちろん断った）。

前の席のキムラーナはプリントを回す時、必ず後ろを向いて丁寧に頭を下げながら両手で渡してくれる（その時なぜか椅子の上に正座している）。

そして休み時間になるとオーマが席を離れるまで、まるでお通夜のような状態になる。

誤解のないよう断っておくと、彼は一般人に暴力を振るうつもりは一切ない。

体も大きいので廊下では人にぶつからないように気をつけて歩くし、ゴミがあれば拾ってゴミ箱に捨てた。

勉強は少々苦手なものの、運動面では目を瞠るような記録を出している。

このように素行だけ見れば彼はむしろ優等生の部類に入る。

しかし、最初の印象が強烈すぎたせいか、未だにクラスメイトと打ち解けられていない……。

彼は彼で寡黙な方なので、なかなか話しかけるキッカケも掴めないでいた。

努力はしているのだが、緊張で力が入って上手く話せなかったり、ビビッた相手が気絶してしまうのだ。

結果、こんな人気のない場所でひとり飯を食う羽目になっているわけだが。

「……部活でも入るか」

とはいえ団体競技は向いている気がしない。

人の姿でも素手で岩ぐらいなら粉々にできる。

この学校に格闘技をやる部があれば活躍できるかもしれない。

彼がそんなことを考えていると。

「あら～、こんな寂しいところで何をしているの？」

やけにのんびりとした声で横から話しかけられた。

「ん？」

オーマがそちらを振り向くと、そこにいたのは金髪の少女だった。

校章からして二年生の先輩。

口調と同じくおっとり美人で、育ちの良さが全身から溢れ出ていた。

サラリサが炎の苛烈さと氷の冷徹さを併せ持つ女傑とすれば、この先輩は華のような気品に溢れた女神である。

「ここでご飯食べてたの？」
「はい」
「ひとりで？」
「そうです」
相手が先輩と分かったので、オーマは丁寧に質問に答えた。
「寂しくない？」
「……」
これにオーマは答えられなかった。
人に弱味を晒すべからず。ここでも家の教えを忠実に守っているのだ。
しかし、嘘を吐くのも誤りになるので、彼は沈黙したのだった。
「なるほど。そっか～」
オーマが黙ったのを見て、その先輩は何度か頷くと――不意に彼が腰かけていた体育館の外階段の隣に座った。
「今日は私もここで食べてもいいかしら？」
「どうぞ」
「ありがと～。私もたまにここでお食事するのよ。静かでいいわよね」

「……ウス」
遠慮なく話しかけてくる先輩に、思わずオーマは口下手な答え方をしてしまった。
だがそれを気にする様子もなく、彼女はドンドン彼に話しかけてくる。
「そういえば君～最近転入してきた子よね？　一回駐車場で見かけたことあったんだけど、お名前は？」
「オーマ……ローゼンです」
「そう、オーマ君ね。覚えたわ」
彼女はゆっくり話しながら、やはりゆっくりとお弁当を箸で口に運ぶ。
少しずつパクパクと食べる様子は小鳥の食事のようだった。
「オーマ君はもうこの学校には慣れた？」
「慣れてきてはいるんですが、クラスメイトに話しかけられなくて」
「あら～」
先輩は頬に手を当てて心配そうな顔をする。
「それは困るわね～」
「はい」
オーマが軽く頷くと、そんな彼の横顔を先輩はチラリと見やる。

「オーマ君は明日もここでご飯食べるの？」
「まあ、たぶん」
「じゃあ私も明日また来るわね」
朗らかな笑みを浮かべ、彼女はそう言った。
今日会ったばかりの一年に明日の約束をする。
明らかに何の得もない行為だ。
「何でそんなに俺に構うんですか？」
「困ってる人は放っておけないもの」
彼女は当たり前のように答えて、言った。
「だって私、生徒会長ですから」

「オーマ君～」
その翌日、本当に生徒会長は体育館裏にやってきた。
その次も。
次の次も。
一週間が過ぎても、彼女との約束は続いた。

「でね、その外に落ちてた誰かの上履きに雀が巣を作ってて～」
生徒会長はいつも朗らかな笑顔でオーマに話しかけてくれる。
彼女のことはこの一週間で可能な限り調べた。
ツクモ＝キサラギ。
王家の親戚筋に当たる尊き血。
才色兼備で物腰柔らかな美少女。
だがそんなことより何より彼女は、困っている人を見ると放っておけない生徒会長なのだという噂を一番耳にした。
お陰で彼女と生徒会は毎日が超多忙。
学校中から相談事が舞い込んで、常にてんてこ舞いの状態らしい。
本来ならこんな場所で見ず知らずの一年生につき合っている時間などないはずだ。
「どう？　そろそろクラスの子と話せたかしら？」
「いえ、まだ」
「そっか～」
しかし、ツクモは今日もこうしてオーマの相談に乗ってくれる。
「何がいけないのかしらね？　オーマ君って、こんなに話しやすいのに」

真剣な顔で首を傾げるツクモ。
「……やっぱりこの面が怖いんですかね」
あまりに彼女がマジメにつき合ってくれるので、オーマはつい自嘲を含んだ呟きを漏らしてしまった。
そんな〝弱味〟に繋がるセリフを人前で口にしたのは初めてのことだった。
「……！」
自分でも思わぬ失態に狼狽する彼に対し、その重大さが伝わっていないツクモは「う～ん？」とまたまた首を反対向きに傾げて。
「そうかしら～？　ちょっと眠そうな目で、愛嬌のある顔だと思うけど？」
と言って、彼女はオーマの頬を軽く撫でる。
その少々気安いともいえる彼女のスキンシップにオーマは硬直する。
と、そこで昼休み終了五分前の予鈴が鳴った。
「あら～もう午後の授業ね。じゃあ、また明日」
ツクモはテキパキと片付けをして校舎へと帰っていく。
「……」
オーマはその背中を見送ったあともしばらくその場から動けなかった。

その日の放課後。
オーマは生徒会室の前まで来ていた。
「……」
彼は『生徒会』のクラスプレートをしばし見つめた後、ノックをしてドアを開ける。
中では生徒会の役員である生徒たちが忙しく働いていた。
資料の束を抱える者。
どこかに電話をかける者。
パソコンに何かを入力している者。
みんな何かしら手を動かしていたので、最初は入ってきたオーマに誰も気がつかなかったほどだ。
「職員室行って確認してきま……わっ!?」
ちょうど廊下に出ようとした生徒がいて、彼がようやくドアを開けたまま突っ立っているオーマの存在に気がついた。
驚いた彼の声で、生徒会室の中の動きは一時的にピタッと止まる。
「な、何だお前……一年？　が、何の用だ？」

先程オーマに驚いた二年生の先輩――ブランギが怒ったような口調で尋ねてきた。
「その、俺は……」
オーマは用件を伝えようとするが、上手く言葉が出てこなかった。
「……」
その様子を見て、ブランギは心の中でボーッとした顔だなと軽く侮る。
面倒だからさっさと追い返してしまおうとしたが――その前に生徒会室の中から「あ～」という声が聞こえてきた。
「オーマ君。いらっしゃ～い」
部屋奥の一番立派な生徒会長机にいたツクモが、入り口の彼に向けてヒラヒラ～と手を振っていた。
「会長……お知り合い、ですか？」
「そうよ～。ブランギ君、入れてあげて」
「はい……」
ブランギは胡散臭いものを見る目でオーマを見ながら、彼を生徒会室の中に招いた。
生徒会の役員たちは、そんな彼を好奇の視線でジロジロ見る。
一年の割にガタイがよいのもそうだが、何よりツクモに名前を覚えられているということが、様々な興味を彼らに抱かせたのだ。

それに多少居心地の悪さを覚えるも、ツクモに用事のあったオーマは生徒会室の奥まで歩を進めた。
「それで？　生徒会に何かご用？」
相変わらずゆったりと、人を急かさない口調でツクモはオーマに尋ねる。
「はい。実は……」
「ん～？」
「……俺も、生徒会に入りたいと思いまして」
彼のひと言は波紋のように、静かな驚きとともになって生徒会室に広がっていった。
唯一、会長のツクモだけはいつもと変わらぬ調子で。
「あら～生徒会のお仕事って大変よ？」
「大丈夫です」
「そう？　なら～」
軽いやり取りで、そのまま彼女が頷こうとした時。
「ちょちょちょっと待ってください会長！」

呆然から脱したブランギが声を上げ、慌てて彼女を止めた。
「何をサラッと許可しようとしてるんですか⁉　こんな突然現れたうすらデカいだけの一年を生徒会に入れる気ですか⁉」
「大きいっていいことよ。それにみんな忙しい忙しいって言ってたじゃない？　オーマ君は力仕事で頼りになりそうだし、ねぇ？」
「ウス。任せてください」
「ほら、オーマ君もこう言ってるし」
「そうじゃなくてですねぇ⁉」
ブランギはバンバンと机を叩いて抗議する。
「我が生徒会はこの学校の顔なんです！　そこに名を連ねるのは校内でもトップクラスの生徒でなければなりません！」
「でも～確か生徒会長に臨時役員を五人まで指名できる権利があったはずよ？」
「うっ……それは」
校則を持ち出され、ブランギは口ごもる。
「し、しかし、俺たちはコイツのことを何も知りません！　せめて何か実績がないと！」
「そうは言っても、オーマ君は転入生だしねぇ」

ツクモはオーマのことを見上げる。
「オーマ君は前の学校で何かやってたことある？」
「いえ」
前も何もオーマは学校に通うことすら初めてである。
当然、学業や校内活動に関する賞や実績など持っているはずもない。
「ほらやっぱり！　やはりこんな馬の骨を生徒会に入れるわけには」
途端に勝ち誇るブランギだったが――不意にオーマに顔をグッと近づけられ、「うっ！」とたじろぐ。
「先輩。俺はどうしても生徒会に入りたいんです。どうしたら認めていただけますか？」
「うっぐっ」
丁寧だが妙な圧のあるオーマの真顔に、ブランギはさらに何歩も後退する。
これ以上は自分が一年にビビッてると思われると考え、彼はとっさに口を開く。
「じゃ、じゃああれだ！　模型部の部室を占拠してる不良を立ち退かせてこい！」
「分かりました」
具体的な内容も聞かずに、オーマはふたつ返事で頷いた。

模型部部室不法占拠。
それは模型部の部員から生徒会に持ち込まれた相談事だった。
クラ高のような名門校でも、なんだかんだ不良というものはいる。
その不良グループは一週間前に、元々部員の少なかった模型部の部室を占拠してしまったのだ。
不良グループは入部届を提出し、書類上は模型部部員になっている。
そのため形式的には彼らが模型部にいることに問題はなく、それが問題をややこしくしていた。
結果、この問題は今日まで保留され続けていたらしい。
「ここか」
オーマは件の模型部の部室が入った校舎別棟Cに辿り着いた。
この高校はやたらと広く、この別棟Cは本校舎から離れた場所にあった。
主に文化部系の部室が入っているらしいが、全部屋の半分も埋まっておらず、部活動以外では物置としてしか使われていない。
この立地も不良に目をつけられた理由なのだろうが……ともかく。
オーマは二、三度拳を握っては開き、それから別棟Cの中に入っていった。

スリッパに履き替え、人気のない廊下を歩く。
時々教室の中から人の気配がするが、基本的には静かなものだ。
が、問題の模型部部室に近づくにつれ、バカみたいな大声が廊下にまで響くようになっていった。
「ギャハハハ！　何言ってんだオメェ！」
「るっせーなバーカ！」
聞くからに粗暴と分かる声だった。
これでは人もあまり近寄らないだろう。
だがオーマは特に躊躇いもなく部室のドアをガラッと開けた。
室内には不良と思しき生徒が五人ほどたむろっていた。
不良グループというには少ない人数だが、やはり絶対数自体は少ないのだろう。
それでも厄介な相手であることに変わりはないが。
「あン？」
「誰だテメェ？」
「一年か？」
ドアを開けたのが仲間でないと分かると、彼らは途端に敵意を剝き出しにして椅子や机

から立ち上がった。
オーマが室内に入ると、不良たちはあっという間に彼を取り囲む。
「何の用だテメェ？」
リーダー格と思しき気合いの入った髪型の不良がオーマを威嚇する。
「生徒会の手伝いす」
「はあ？」
「先輩方に模型部から出ていって欲しいそうです」
オーマはツクモに眠そうと言われた目で相手を見返して用件を告げる。
不良たちは彼の動じない態度にいくらか戸惑いを見せた。
彼ら自身は例外として、基本的にこの高校にいるのは大抵品がいいだけのお坊ちゃんで、荒っぽい態度に慣れていない連中ばかりだからだ。
「模型部も困ってるらしいんで」
戸惑う彼らにオーマは再度部室退去を平和的に頼む。
が、そこで気を取り直した不良たちは一斉に喚き始めた。
「ン、ンだとぉ⁉」
「ザけんなテメェ！」

「ランバさん！　コイツ俺らのこと舐めてますぜ！」
「おう！」
ランバと呼ばれたリーダーはグィィとオーマを下から睨めつける。
「ちっと身長があるからってチョーシ乗ってんじゃねぇぞ？　お？　その程度で俺がビビると思ってんのか？」
ランバは喋くりながら、これみよがしに拳に魔力をまとった。
魔力による身体強化は魔法の中でも基礎的な技術である。
現代では攻撃的な魔法はあまり習う機会がない。
だがこれは基礎中の基礎だけあって、一般的な高校生なら誰でも使える魔法だった。
本来は自衛のために習う魔法なのだが、アウトロー同士の喧嘩では頻繁に利用されていた。当然、無防備な状態で強化した拳に殴られればただでは済まない。
「へへっ、こいつで殴られたらテメェただじゃ済まねぇぞ」
「魔法を使った授業の成績だけならランバさんもエリートどもに負けねぇんだ！」
「ランバさんはパンチングマシンで１５０kg出したこともあるんだぜ！」
「謝った方がいいんじゃねぇかオメ～？」
不良たちはランバの実力に余程の信頼を寄せているらしく、調子に乗って囃し立てた。

「どうだぁ？　土下座するなら許してやるぜぇ？」
ランバは拳をちらつかせながらオーマを脅す。
が。
「あの……」
オーマはなぜか言いにくそうに目を逸らす。
「あん？」
「……それで俺を殴んない方がいいっすよ」
「ハァ～～～!?」
オーマの忠告を、ランバは挑発として受け取った。
「上等だテメェ！」
短気な彼は躊躇いなく全力で拳を振りかぶる。
「……」
それは喧嘩慣れした者なら簡単に避けられる大振りなパンチだった。
だがオーマは避けなかった。
ズシンッ‼と人体を殴ったとは思えない重い音がした。
「……!?」

しかし、驚愕に顔を蒼くしたのはランバの方だった。
（え、岩？　鋼？）
殴った感触がいつもと違う。
人体よりもっと強度の高い、というか密度の高いものを殴ったような意味不明な感触。
喩えるなら「山」。
人が山を殴ってもビクともしない。
そんな当たり前の事実を突きつけられたような状態。
さらにそれだけでは終わらなかった。
「!?」
拳はオーマの肉体で受け止められた。
そしてランバが拳に込めた魔力は、相手の持つ圧倒的な魔力質量に弾き返され、その全ての衝撃が彼に跳ね返る。
「あが――っ!?」
結果、ランバは全力疾走してトランポリンにぶつかったみたいに、まっすぐ横向きに吹き飛んでそのまま部室の壁に叩きつけられた。
「ランバさん!?」

「リーダー!?」
「あがっあがが……」
不良たちが慌てて駆け寄るが、壁にめり込んだランバはしばし呻いたあと白目を剝いて失神した。
「〜〜〜!?」
リーダーを失った彼らはオーマの方を振り返る。
「……」
オーマは制服についた埃を払うと、一歩一歩ランバへと近づいた。
「ままま待ってくれ！」
「悪かった！　俺らが悪かった」
「出てく！　出てくから！」
「これ以上は、なっ？　なっ？」
「……」
慈悲を懇願する不良たちを無視し、オーマはランバを担ぎ上げる。
「ランバさぁん！」
「お、おい！　どこ連れてくつもりだ!?」

不良のひとりがオーマの前に回って彼を食い止める。
ランバを取り返そうというのか、歯をガチガチと鳴らしながら両腕を広げて通せんぼしていた。
実力差を知りつつ抵抗する彼の様子を見ながら、オーマはひと言。
「保健室」
とだけ答えた。
「へ？」
呆気に取られた不良は腕を下ろし、オーマはその横を通り抜けた。

翌日。
徒歩で登校してきたオーマを、高校の校門で出迎える者たちがいた。
「おはようございます！」
「「「おはようございます！」」」
頭に包帯を巻いたランバとその仲間たちは腰を折り曲げ、現れたオーマに深々と頭を下げた。
「あの、ランバ先輩？」

「先輩なんてよしてください！」
困惑するオーマに対し、ランバは頭を下げたままへりくだる。
「少し喧嘩が強い程度で粋がってた俺より、アンタの方がずっと強かった……！　なのに自分から手は出さず、おまけに喧嘩売った俺を保健室にまで……！」
「そりゃあ当然のことです」
「その度量の広さ……感服しました！　俺を舎弟にしてください！　お願いします！」
「「「おねがいしゃっす！」」」」
「……」
頭を下げる彼らに対し、オーマは頬を掻いて熟考する。
「分かった」
「……！　ありがとうございます！」
「ただし、今後は人に迷惑をかけないでもらえますか？」
「それが命令なら！」
ランバの決意は固いと見て、オーマも考えを決めた。
「……ん」
「よっっっしゃあああああ！」

オーマは頷き、ランバは喜びで舞い上がる。
この出来事はまたたく間に校内で噂として広まった。
彼のクラスメイトは、
「やっぱり怖い……」
と恐怖し。
生徒会のブランギは、
「へっ！　どうせ何かの偶然だろ」
と事実を認めず。
そして大半の生徒――特に模型部――は、ただ校内の不良がおとなしくなったことを喜んで歓迎した。

さて放課後。
今度は生徒会の方から呼び出され、オーマはツクモの許に足を運んだ。
「……な感じで、ランバさんたちは模型部から立ち退いてくれるそうです」
「そう。よかった～」
オーマの報告を聞いてツクモは微笑んで頷く。

「それじゃあオーマ君には臨時役員として生徒会に入ってもらうわね」
「……」
ツクモの決定にまだ文句を言いたそうな者もいたが、オーマが結果を出しているため誰(だれ)も異を唱えられなかった。
「でも～、最後にひとつ訊(き)いていい？」
「はい」
「どうして生徒会に入りたいと思ったの？」
「……」
オーマはそこで一瞬(いっしゅん)ツクモから目を逸らした。
「……役に立ちたかったんで」
「ふ～ん？」
ツクモはそれから数秒オーマを見つめ、それから彼に向かって手を差し出した。
「ならいいわ～。これから一緒(いっしょ)に頑張(がんば)っていきましょう、オーマ君」
「……ウス」
オーマはツクモと軽く握手(あくしゅ)を交(か)わし、そうして彼は生徒会の一員として認められたのだった。

続きは、10月17日発売のファンタジア文庫で！

©Namekojirushi, RED FLAGSHIP 2020